

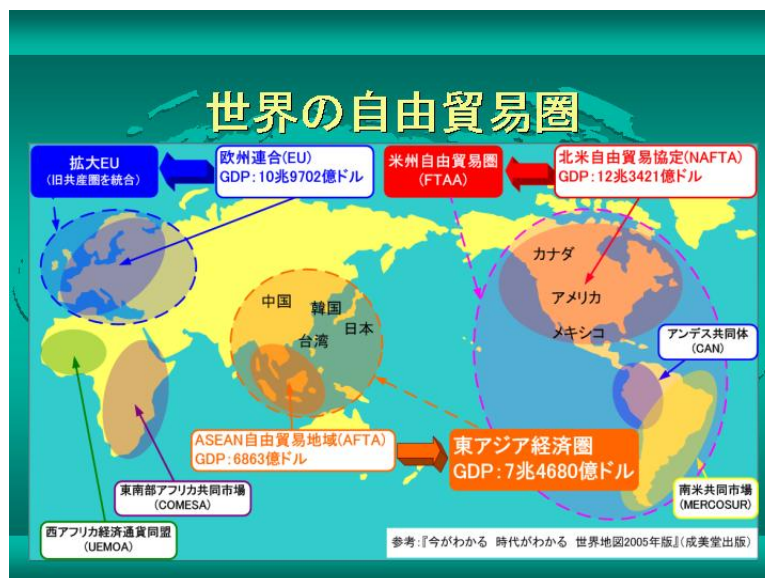
講演3

「東アジア共同体は可能か？一日・中・韓三国の歴史問題をめぐって」

人文科学研究所所長 金 文京

午前中のお話は大変難しい、深刻なお話でしたが、私の話は非常に簡単です。皆さん、お昼も召し上がってちょっと眠たいというかたもおられるかと思いますが、半分ぐらいうとうとして聞いていただいても大丈夫ですので、どうぞご安心ください。

私のテーマは、「東アジアの共同体は可能か？」です。多くの方が現在興味を持っておられる問題だと思います。現代はグローバリゼーションの時代ということで、地球共同体あるいは地球村がだんだん一つになっていく、経済的にも情報面でも交流が非常に活発になっていますが、また一方では、地域統合の時代ともいわれています。これはグローバリゼーションに向かううえでの一つの過程であるとも考えられます（図表1）。



図表 1

現在、そのいちばんの代表がヨーロッパ連合（EU）です。約10兆ドルの経済規模があるといわれ、それが拡大EUになろうとしている。もう一つ、アメリカには北米自由貿易協定というものがありまして、これが12兆ドルの経済規模ということで、これも拡大してアメリカ全体の自由貿易圏を作ろうという話になっているわけです。

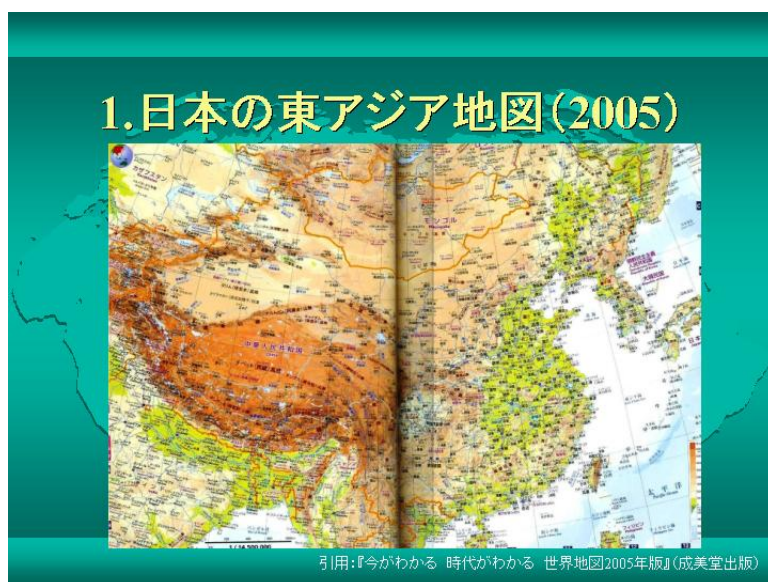
このアメリカとヨーロッパは、主にキリスト教文化圏ですが、一方のアジアでは、ご存じのように、ASEAN（東南アジア連合）がありまして、ここが今、自由貿易地域になっています。ただし経済的規模は小さい。このASEANに世界第2位の経済規模を誇る日本、そして最近、経済発展著しい中国、韓国が加わって、対抗上、東アジアでもそういう経済圏を一つ作ろうという動きが急に持ち上がっているということは、皆さんご存じだろうと思います。これがもし実現しますと、7兆ドルぐらいの規模のヨーロッパ、アメリカに匹敵する経済圏ができるわけです。東アジアが、他の地域との対抗上、まとまったほうが今後いろいろな意味で有利であるということとはだれもが分かっているわけですが、ここで問題なのが、最近話題になっております中国と日

本、あるいは韓国とのさまざまな意味でのあつれき、対立です。

昨年の12月でしたか、マレーシアで東アジアサミットというのが開かれて、そこで東アジア共同体の提案が行われました。東アジア共同体構想です。ここでも中国案と日本案というのが対立しています。中国案というのは、日中韓の三国にASEANを入れるというものです。それに対して、日本が提示した案は、日中韓ASEAN+インド・オーストラリア・ニュージーランドというわけです。このインド・オーストラリア・ニュージーランドを入れるという日本案は、だれもがすぐ分かるように、その目的の一つは中国を牽制しようという、一種の中国と日本との覇権争いのような感じになっています。

日中韓の現在の対立点が一体どこにあるのかと申しますと、まず一つは、領土問題です。日本で言う竹島、韓国でいいますと独島の領有権の問題。日中間では、日本の尖閣列島、中国でいう釣魚台群島の問題があります。もう一つは、中国と韓国の間には古代国家の高句麗がどちらに所属するかということで、これは学問的な問題ではありませんが、これもかなり深刻に中韓の間で論争が行われています。もう一つは、東シナ海での天然ガスでの開発問題です。これも最近、新聞紙上をにぎわしていますので、みなさんご存知でしょう。そして、歴史教科書問題です。南京虐殺等々の問題です。これは中韓と日本の間で論争があります。

そして何といっても極め付きは靖国神社問題ということになるわけです。私の今日の「日中韓の歴史問題」というタイトルで、もしかしたら靖国問題について私が話すのではないかと思われたかたがおられるのではないかと思います。残念ながら靖国神社の話はしません。これはいろいろなかたがおっしゃっているわけですし、私が今日お話ししようとするのは、今お話したような問題の背後にあって、恐らく皆さんがあまりご存じない歴史的な問題であります。



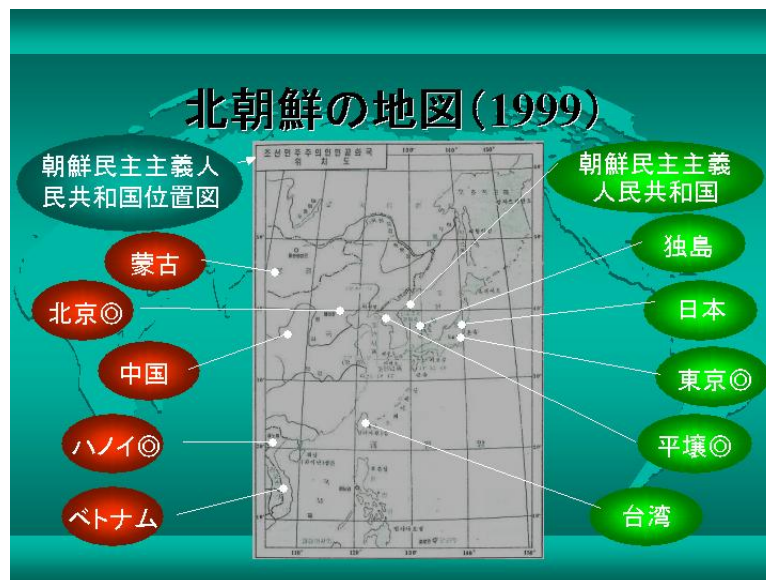
図表 2

図表 2 が今の東アジアの地図です。まず、中華人民共和国があつて首都は北京、朝鮮半島には北に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、首都は平壤、そして南には大韓民国があつて、首都はソウル。その東にはもちろん日本があります。そして南に台湾があります。

これは皆さんご存じの当たり前の地図で、何の変哲もありません。別に日本の東アジア地図と、特に「日本の」をつける必要はない、世界中どこでも東アジアの地図はこうなっているだろうと



図表 3



図表 4

皆さんお思いでしょうが、実はそうではありません。

例えば、お隣の韓国で出ている地図（図表 3）、これは 2005 年のものですが、現在ソウルで売られている韓国の地図もこれと同じです。この地図を見ますと、朝鮮半島全部が大韓民国全図で全部大韓民国になっています。首都はソウル、平壤は地方都市です。どこにも北朝鮮がない。

なぜないかといいますと、韓国は今、北朝鮮といろいろ交流をして、北朝鮮という国があるということは実質上認めているのですが、建前上はあくまでも大韓民国が朝鮮半島の唯一の政府であるということになっていて、北朝鮮は認めていない。それでこういう地図になっているわけです。

その建前というのは、大韓民国憲法の第 1 章に、「大韓民国の領土は、韓半島及びその附属島嶼とする」とあるのが、それです。この附属島嶼というのは付近の島ということで、その中に竹島（独島）も入っているわけです。要するに、北朝鮮はそこにあるけれども、あれは不法な存在で、

ただ占拠しているだけで合法的な政府ではなくて、合法的には大韓民国が唯一の政府で、領土も全部支配しているのだという建前になっています。

北朝鮮のほうはどうかといいますと、**図表 4** は北朝鮮で数年前に出た地図です。これを見ますと、まず、朝鮮民主主義人民共和国位置図となっていまして、朝鮮半島は全部朝鮮民主主義人民共和国です。首都は平壤です。独島はありますが、ソウルはなんとありません。もちろん大韓民国もありません。つまりこれは先ほどの韓国の地図の逆で、朝鮮半島の唯一の政府は朝鮮民主主義人民共和国だという建前によって描かれているわけです。

朝鮮民主主義人民共和国の憲法というものを見ますと、そこに、「朝鮮民主主義人民共和国は、北半部において人民政権を強化し」うんぬんと描いてあります。ですから、今は北半分しか支配していないということを認めているので、韓国の憲法よりはちょっと現実的なのですが、それでも北半分といっている以上は、南半分も朝鮮民主主義人民共和国であるということなのです。ですから、南にある大韓民国は不法な政権であるという前提で、この憲法もできています。

これはちょっと不思議な感じもしますが、対立している分裂国家ですから、さもありなんと思いでしょうが、これが実は困ったことで、国の名前だけではなくもっといろいろな違いがあります。

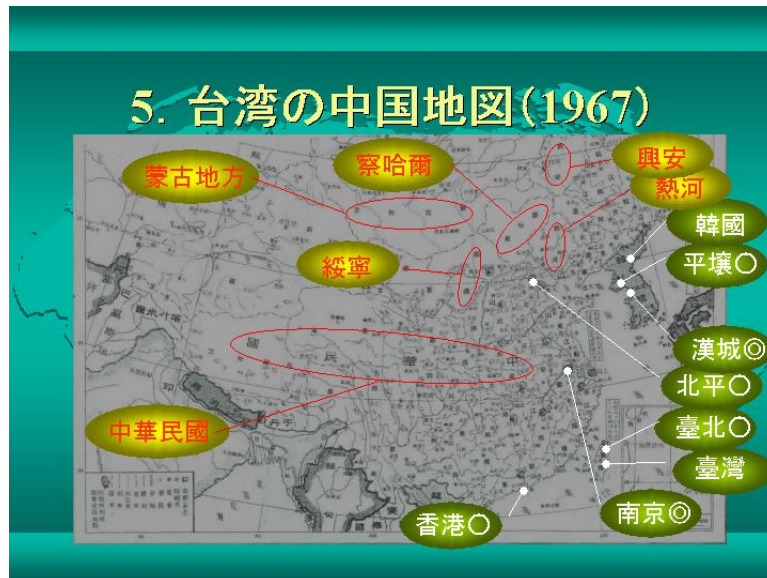
例えば、朝鮮半島は昔から道制で、韓国の地図の半島北部には五つの道があります。これは昔と同じです。ところが北朝鮮の地図を見ますと、この五つのほかに「両江道」「慈江道」という二つの道があつて、これは 1945 年以後に北朝鮮が作った新しい道です。これは韓国の地図には載っていません。ですから、地名も違います。

もう一つ例を挙げますと、2004 年に北朝鮮の中国国境でなぞの爆発事件が起こったということを皆さんご記憶かと思いますが、その場所が金亨稷（キムヒョンジク）郡というところでした。この事件当時、韓国では多くの人が爆発事件以上にこの地名に驚いたのです。金亨稷というのは金日成のお父さん、つまり今の金正日のおじいさんになる人らしいのですが、それを記念してこういう郡の名前にしてしまっているのです。しかし、これは韓国では専門に北朝鮮を研究している人は知っていたでしょうが、ほとんどの人が知らなかったのも、こんな地名があつたのかと驚いたわけです。

というわけで、地図というのは、現実の地名、行政区域を正しく反映しているからこそ地図で、そうでなければ地図としては役に立たないわけですが、朝鮮半島では北と南で出ている地図がどちらも正しい地名や行政区域を反映していない、いわば架空の地図で、地図としては役に立たない。もし皆さんがソウルで買った地図で北朝鮮へ旅行に行く、平壤で買った地図で韓国へ旅行に行くとするれば、現実にある地名が地図になかったり、あるいは逆に地図にある地名が現実にはなかったりするわけです。これは非常に奇妙なことです。

では、こういうことは朝鮮半島だけで行われているのかというと、実はそうではありません。次はお隣の中国に行きます。**図表 5** は 1967 年とちょっと古いのですが、台湾で出版された中国全図です。これを見ますと、まず全体が中華民国になっています。これはもちろん中華人民共和国が 1949 年に成立し、この当時、大陸は中華人民共和国が支配しているのですが、台湾の地図では中華民国となっています。首都は南京です。北京はどうなっているかというと、北京はなくて、北京は「北平」となっています。これは北京の 1945 年以前の名前です。

それ以外にも、この地図にはいろいろ不思議な点があります。たとえばモンゴル人民共和国があるはずのところは、「蒙古地方」になっています。これば、中華民国はモンゴル人民共和国を認



図表 5

めていなかったのも、中国の一地方になっているわけです。

それ以外にも、この地図にはいろいろ不思議な点があります。たとえばモンゴル人民共和国があるはずのところは、「蒙古地方」になっています。これば、中華民國はモンゴル人民共和国を認めていなかったのも、中国の一地方になっているわけです。そのほか興安、熱河、綏寧など、現在ない地名があります。これは基本的には 1945 年以前の、中華民國がまだ大陸を支配していたころにあった地名で、現在はありません。ですから、この地図は一種の歴史地図であって、現実の地図としては問題があるのですが、1967 年の段階でもこういう地図を台湾では売っていて、学校の教科書でも教えていました。

ちなみに朝鮮半島は全部が韓国になっていて、首都は漢城（ソウル）、要するに韓国の主張どおりの地図になっています。漢城は、ソウルの中国名、というか、朝鮮王朝時代、朝鮮が中国に朝貢していた時の地名です。

台湾の憲法を見ますと、「中華民國の領土は、その固有の領域による。国民大会の決議を経なければ変更することができない」となっています。この固有の領域というのは、1945 年以前の領土、つまり大陸全体のことです。今、台湾の陳水扁総統をはじめ、台湾の独立派は、これを換えようとして、それに中国が反対しているという状況は皆さんよくご存じだと思います。

これもちょっと考えてみると、少し不思議な感じがします。台湾は、実際は台湾しか支配していないのに、中国全部を支配していると主張し、北京にある政府は合法的ではないといっていたのですが、1991 年に、憲法は変えていませんが、この主張をやめました。これは北京政府にとっては、自分たちが支配しているということを認めてもらったわけですから、本来は歓迎すべきことであるはずなのですが、それを北京が反対しているというのは、ちょっと奇妙な話です。

ところで、1991 年以前でも、台湾で中国大陆の地名がありのまま正確に記載されている、北京がちゃんと北京になっている地図というものもあります。国防研究院敵状研究所編の「共匪窃拠下的中国大陆分省图」というのがありますが、これには北京と書いてあります。この地図はどういう意味かということ、共匪というのは共産党という匪賊（どろぼう）ということ。共産党のどろぼうが盗んで占拠した大陸の地図だということ。こういう肩書きをつけないと正しい



図表 6

地図が書けないという非常にやっかいな状況になっています。

1991 年以降、台湾は大陸に対する権利を放棄してしまったので、憲法はまだ変えていませんが、その後の地図は、北京などの地名を正確に記載しています。ただ中華人民共和国という国号は出さず、全体が中国という曖昧な書き方になっています。

次に、図表 6 は 1958 年に中国で出版された地図です。これは当たり前ですが、中華人民共和国が全部を支配している。モンゴル人民共和国もちゃんとあります。朝鮮半島はどうなっているかといいますと、先ほどの台湾の地図とは逆に、全体が朝鮮になっていて、平壤が首都で、漢城（ソウル）は地方都市です。

この当時、ベトナムもまだ南北ベトナムに分裂していましたが、全体が「越南」となっています。これは北ベトナムのことです。首都はハノイ、サイゴンが首都ではない。ですから、北朝鮮、北ベトナムを合法政権だと主張する立場から、韓国と南ベトナムを抹殺しているわけです。中華人民共和国の憲法には、「台湾は中華人民共和国の神聖な領土の一部である」とちゃんと書かれています。

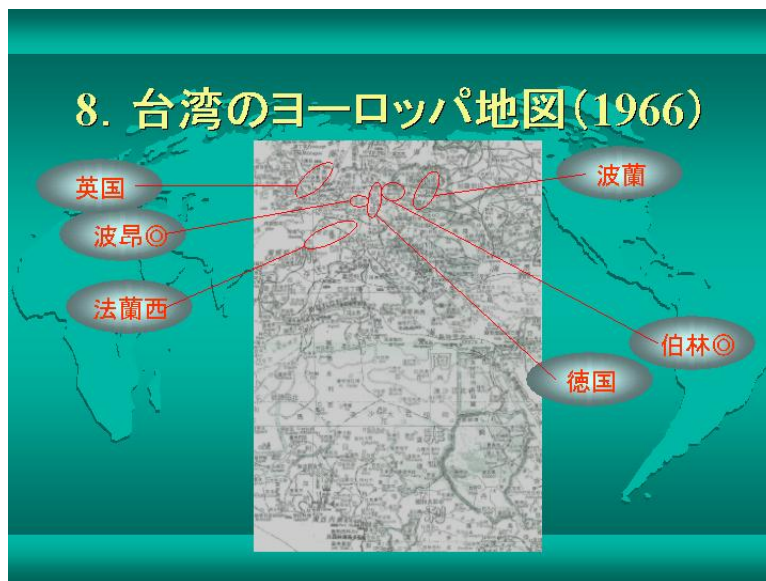
このように韓国、北朝鮮、台湾と大陸の憲法には、いずれも領土規定があるわけですが、憲法に領土規定があるというのは、実は世界的に見ると非常に少数です。例えば、日本国憲法には領土規定というものはありません。北方領土は日本の領土なんていうことは憲法には書いてありません。憲法というのは、人民の権利や政府の組織などを決めるもので、領土規定というのは本来憲法にはあまりなじまないものです。アメリカやヨーロッパの憲法にも領土規定というものはありません。ところが東アジアの憲法にはそれがあって、しかも実際に支配していないところを自分の領土であるという主張が盛り込まれている。それが地図に反映しているということです。

図表 7 は台湾でかつて出していた東アジア地図です。これは図表 6 の大陸の地図とは反対で、中国大陆はもちろん全体が中華民国、ベトナムはサイゴンが首都で、朝鮮半島では韓国で、ソウルが首都です。中国大陆の地図と反対です。

次に韓国で出ている東アジア地図はどうなっているかを見ましょう（図表 8）。まず、朝鮮半島は言うまでもなく大韓民国です。中国は中国となっていますが、1975 年段階では中華民国のこと



図表 8



図表 9

です。基本的に台湾と同じですが、ちょっと違うところがあって、例えば北京は首都になっています。そして台北も首都になっています。ですから、これは中国は一つですが、実質上二つの政府があるという風に書かれていると言えるでしょう。

これ以前の 60 年代の地図では、台湾の地図とほとんど同じですが、75 年になりますと、米中の国交締結、日中国交回復などいろいろあって、韓国がだんだん中国寄りになっていく過程で、このように地図を書き換えているということが分かります。現実の地名は変わっていないのに、政治状況によってこのように地図が変わっていくわけです。

第二次世界大戦後に四つの分裂国家ができましたが、そのうちの三つまでが東アジアの国、つまり中国、朝鮮半島、ベトナムです。もう一つはドイツです。図表 8 は台湾のヨーロッパ地図で



図表 10

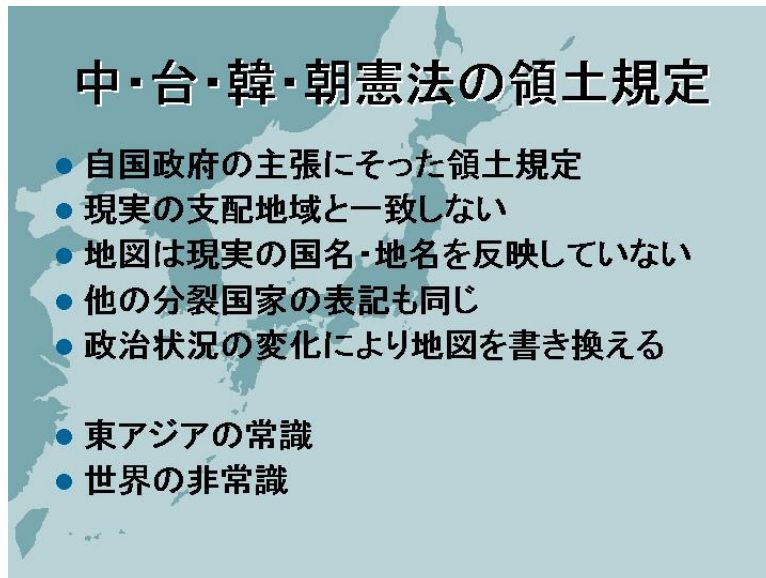
すが、これを見ると「德国」というのがドイツで、東ドイツ、西ドイツというのは書いていません。ベルリンとボンが一応首都になっているので、二つあるような、しかし一つのような、非常にあいまいな形になっています。これは韓国で出た地図でも同じです。

では、ドイツはどのようなだろう。図表 10 は分裂時代、1968 年のドイツの地図です。これはちゃんと東ドイツと西ドイツを分けて、国名もきちんとドイツ民主主義共和国、ドイツ連邦共和国と分けて書いてあります。これは多分ドイツ人には実際に東ドイツと西ドイツがあったわけですから、それをそのまま書いただけの話で、それを一つだと見せかけるような発想というのはないと思います。ドイツでこの当時に出た東アジアの地図でも、分裂国家は分裂したように書いてあります。

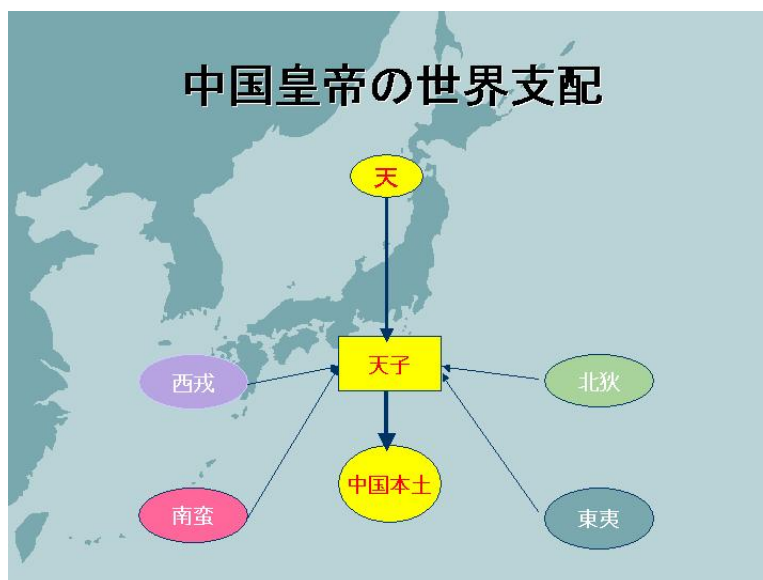
これは東アジアとヨーロッパの発想、文化の違いでしょう。あるいは東アジアとそれ以外の地域との違いと言ってもいいでしょう。先週、中国の李肇星外相が日本の靖国問題を批判したとき、ドイツを引き合いに出して、日本と比較していましたが、それはそれ自体正しいのですが、ドイツと東アジアの間には、実はこういう違いもあるのです。

以上をまとめて、東アジアでの憲法の領土規定を考えて見ますと（図表 11）、まず、自国政府の主張に沿って領土規定がなされている。これは、国境地帯にある竹島や尖閣列島のような係争地域とは問題が本質的にちがいます。係争地域を自分の領土として地図に描き入れるということはどこでもあるわけで、かつてフランスとドイツ、あるいはドイツとポーランドの間にもそういうことはありました。これは、それとは全く別で、全く自分が支配していない地域についても自分の領土であると主張して、地図にも描くし、憲法にも規定する。ですから、現実の支配地域とは一致していません。

つまり、地図が現実の国名、地名を反映していない。しかも自分の国だけではなくて、他の分裂国家の場合にも同じように、自国の支持するどちらかの国の主張にそって架空の地図を描いてしまう。しかも、それが政治状況の変化によって地図を変えていく。詳しくは申せませんが、東アジアの戦後の地図を時代順にずっと比べてみると、このほかにもいろいろ細かいことで面白いことがあります。



図表 11



図表 12

これが東アジアの常識である。日本は挙げませんでしたが、実は日本も同じであるということは後にお話いたします。これは東アジアの常識ですが、世界の非常識です。地図の非常識といってもいいと思います。

こういうことは一体なぜ起こったのかといいますと、その始まりはやはり中国です。

中国は昔、皇帝が支配していたわけですが、皇帝権力の根拠は、まず天があって、中国の皇帝は天の子どもであるということで天子というわけですが、天子は天の命令を受けて世界全体を支配する（図表 12）。中国本土は当然ですが、それ以外の周りの国も本当は全部中国が支配をしている。ただ、直接支配をするのは難しいので、周りの国は全部中国より文化的に劣っている南蛮や北狄など野蛮人であって、これらは中国に朝貢して、中国の皇帝をあがめているという考え方です。こういう自国中心的な考え方は、古代には世界中にありましたが、中国は近代以前までそ

れをずっと維持したというところが非常に特殊なところですよ。

その中国皇帝の世界の支配者としての正統性を、儒教の經典である『礼記』では、孔子の言葉として、「天に二日無く、土に二王無し」と言っています。この場合の王は皇帝という意味です。孔子の時代にはまだ皇帝という言葉がなかったので、王は実質上、皇帝という意味です。つまり、太陽が一つしかないように、全土、全世界には一人しか皇帝がいない。中国皇帝は、世界の唯一の支配者で、かつ文明の中心である。これがいわゆる中華思想です。皇帝はただ一人。もし正統皇帝以外の皇帝がいた場合は、それは偽の皇帝で、その朝廷は偽の朝廷で、そこに仕えている役人は偽の官であるということになります。

では中国以外の国と中国との関係はどうなるかといいますと、これは「朝貢冊封体制」と呼ばれていますが、中国以外の国は世界の支配者としての中国皇帝の正統的地位を認めて、中国に貢ぎ物を持っていく（朝貢する）。中国皇帝は、その朝貢国の現地で支配権を認め、王などに冊封する。つまり、周りのほかの国は皇帝といわない。中国だけが皇帝で、その下で王などになる。朝貢した国は、中国の年号と暦を使用することが条件になって、それさえやれば、あとはかつてにやっつかまわない。中国は内政に干渉しない。これが朝貢冊封体制というもので、歴史的に変化はありますが、中国の対外政策は基本的にずっとこれです。

こういう関係では中国とそれ以外の国との対等な関係はありえません。これはむしろ過去のこととで、今では中国もむしろ諸外国と対等な関係を結んでいるわけですが、実は中国は現代でもこれに似た政策をとっています。それは中国が今、香港でやっている、あるいは台湾に対してやろうとしている「一国両制」という制度です。まさか今、中国が世界の支配者だとは思っていないわけですが、しかし少なくとも中国は一つであって、香港や台湾については、中国は一つであり、その中国の正統的な政府は北京政府である、ということさえ認めれば、あとは現地で高度の自治を許す。台湾については、軍隊さえ持っていていいといっているわけです。これは発想としては、かつての「朝貢冊封体制」と非常に似ています。もちろん今は皇帝もいませんし、世界の支配者であるといっているわけではありませんが、考え方は似ています。

こういう体制が成り立つためにはどういう条件が要るかといいますと、まず当然、中国が統一された状態で、皇帝が1人だけである。これが2人以上いると非常にややこしいことになります。それから、周りの国が朝貢してくれる、あるいは少なくとも朝貢するふりをしてくれることが条件です。朝貢というのは、実際には一種の貿易で、それも朝貢する側にとって非常に分のいい貿易です。中国に貢ぎ物を持っていくと、その何倍ものお返しをくれるわけですから、これは非常にうまみのある貿易だったので、周りの国はそれもあって、中国に朝貢をする、あるいはするふりをしていたわけです。

では、中国が分裂していた時代、複数の皇帝がいた場合は一体どうなるのか。もう一つ、周りの国が朝貢は嫌だ、中国の皇帝の世界支配者としての地位を認めないといった場合はどうなるのか。

分裂し、複数の皇帝がいた典型的な例が三国時代です（図表 13）。魏と蜀と呉の三つの国が争っていたわけですが、この関係が非常に面白いのです。

魏と蜀は北朝鮮と韓国、あるいはかつての台湾と大陸との関係と同じで、お互いを否定する関係です。自分が正統だ。相手方は存在しない。相手の皇帝は偽の皇帝だという関係です。ところが呉はちょっと違います。呉は魏に対しては、最初のうちは服従するポーズを取っていて、一応朝貢しますが、その後自分も皇帝になったという関係です。初期においては朝貢関係、後になる



図表 13

と蜀と同じく対立する関係です。

面白いのが呉と蜀で、呉の孫権は蜀に対して、「二帝並尊」、つまり2人の皇帝が平等の立場で条約を結んで魏に対抗しようと持ちかけます。魏がいちばん強いので、蜀と呉が魏に対抗するためには同盟を結ぶしかないので、この条約は蜀にとっても有利です。しかし自分が唯一の皇帝だという立場から魏の皇帝を偽物と見なしながら、一方で呉の皇帝と対等な関係を結ぶというのは矛盾で、そこに蜀のつらい立場があらわれています。

以上を整理しますと、魏と蜀は正統を争って互いに存在を否定して、相手を偽の皇帝、偽魏とか偽蜀などと呼んでいます。魏の立場から見ますと、皆さんが多分大好きな諸葛孔明は「蜀賊諸葛亮」ということになります。これは先ほど台湾が共産党を共匪とよんだのと同じことですね。正統とは認められない国や皇帝に「偽」をつけるのが中国史では例になっていまして、例えば日本が戦前に作った満州国は、中国では偽満州国、皇帝は偽満州皇帝、総理は偽総理というように、必ず「偽」をつけてよびます。

次に呉は、一時、魏に朝貢をしていて、呉王という称号を魏の皇帝からもらっていた。呉と蜀は二帝並尊の原則で同盟して、魏に対抗した。呉と蜀の二帝並尊の同盟というのが、実は中国史上、近代以前において、2人の皇帝が対等の立場で結んだ唯一の同盟です。これ以降は対等の関係で結んだというのはなくて、例えば中国が分裂して非常に弱くなったような場合でも、例えば兄弟や叔父とおいということで、とにかくあくまでも差をつけるというようになっています。

このような中国の考え方が、実は東アジアに非常に大きな影響を与えています。先ほど日本も例外ではないといいましたが、日本にも中国と同じ正統思想というものが実はあります。例えば南北朝時代に、北畠親房という人の『神皇正統記(じんのうしょうとうき)』という本があります。北畠親房というのは南朝側の人で、南朝の天皇が正統であるという立場から書かれた本です。もちろん南朝は負けてしまったのですが、負けたけれども南朝が正統である。北朝の天皇は偽皇であるという立場から書かれています。

この本はその後、江戸時代から明治にかけて非常に大きな影響を与えています。例えば明治になってから、「南北朝正閏論」というものがありますが、閏というのは偽物ということです。これ

は1911年、大逆事件の直後に起こった論争ですが、今日のシンポジウムで後援をさせていただいている読売新聞と非常に深い関係があります。この当時まで、明治政府は一応南朝が正統だという立場だったのですが、教科書は南北朝が対等だという書き方になっていました。読売新聞がそれはけしからんという社説か何かを書いて、それで非常に大きな問題になって、結局、南朝を正統とするということで、吉野朝廷と呼んで、1945年まで教科書では南朝を正統として、北朝の5人の天皇は偽皇ということになってしまったわけです。

しかし、現在の天皇はご存じのように北朝系統ですから、これは明らかにフィクションで、本当ではありません。それを南朝正統だという思想に基づいて、現実をいわば歪曲しているわけです。

戦後はむしろ南朝正統論などはなくなり、今の教科書では南北朝対等ということになっていますが、南朝正統論がまったく影を潜めたわけでは実はありません。最近、女帝問題のせいで、天皇関係の本がたくさん出ていますが、それらの本には今の天皇は125代だと書いてあります。これは実は南朝を経由しての数え方で、北朝の方で数えると実は126代になります。つまり125代というのは南朝正統論の立場からの数え方なわけです。このこと昨今の天皇論議ではあまり問題にされていませんが。

今、出ている歴史辞書などの天皇の系図、あるいは天皇関係の本に出ている天皇の系図も、神武天皇を1代としてナンバーが振ってありますが、北朝の5人のところには北朝と書いてあって、カウントしていません。一応1945年でこの問題は終わったように見えるのですが、実は終わってなくて、今でも続いている問題です。主に南北朝時代の日本の正統思想というのは、先ほどの中国の魏が正統かそれとも蜀が正統かという論争がずっと後世まで続くわけですが、その影響を受けてこういうことになっているわけです。

こういう精神構造というのは、主に朱子学の影響ですが、日本人も共有しているわけです。もし万一、1945年8月15日にソ連軍が進駐してきて、アメリカとソ連とで東日本と西日本を分割して、そのときたまたま京都にいた皇族が即位して天皇になって、天皇が東京と京都に2人いるような形にかりになったとしたら、日本も先ほどの朝鮮半島や中国と多分同じようなことをしただろうと思います。南北朝と同じように、お互いにどちらが正統かを争って、京都で出ている日本地図では京都が首都になっていて、東京で出ている地図では東京が首都になっている、そういうことにならなかったとは言えないような思想的背景が日本にも実はあるのです。こういう正統主義的思想と、それによって現実を歪曲してしまう発想は、東アジア諸国が歴史的に共有してきたものであります。

では、近代以前に東アジアでの朝貢冊封体制は実際にどういう関係になっていたか(図表14)。まず、もちろん中国皇帝がいちばん偉いわけです。朝鮮とベトナムは中国にもっとも近い国で、代表的な、中国から見れば模範的な朝貢国です。日本は海を隔てて遠いので、時によって朝貢したりしなかったりでした。この関係での皇帝とその子供の呼び名を示したのが図表14です。中国皇帝の子どもは跡取りが太子で、それ以外は王になります。朝鮮国王はここと同等のランクになります。朝鮮国王の跡取りは太子とはいえず、世子といってランクが一つ落ちるようになっています。

日本とはどうかといいますと、江戸時代朝鮮から通信使が来ていましたが、朝鮮側では江戸にいた将軍は日本国王だと思っていて、朝鮮国王と日本国王は対等な善隣関係になっています。日本にとってこれが非常に都合がいいのは、このようにしておく、この上に天皇がいて、天皇と



図表 14

中国の皇帝は対等な関係になる。ただし、このことは朝鮮側あるいは中国ではあまりよく分かっていませんでした。朝鮮では、どうも天皇は先ほどの偽皇（偽の国王）だと思っていたふしもある。これはあまりはっきりとは分かっていない、日本は天皇の存在をあいまいに、隠していたわけです。その方が都合がいいわけですから。

ただ、朝鮮側では国王といていたわけですが、日本側では実は国王という称号を使いません。国王という称号を使うと、中国に朝貢をしているようなニュアンスになるので、それは面白くないというので、大君という称号を使っていました。いわゆる Tycoon で、これは朝鮮だけではなく、後にアメリカなどにも使っているので、幕末に日本に来たオールコックの『大君の都』という本もあります。

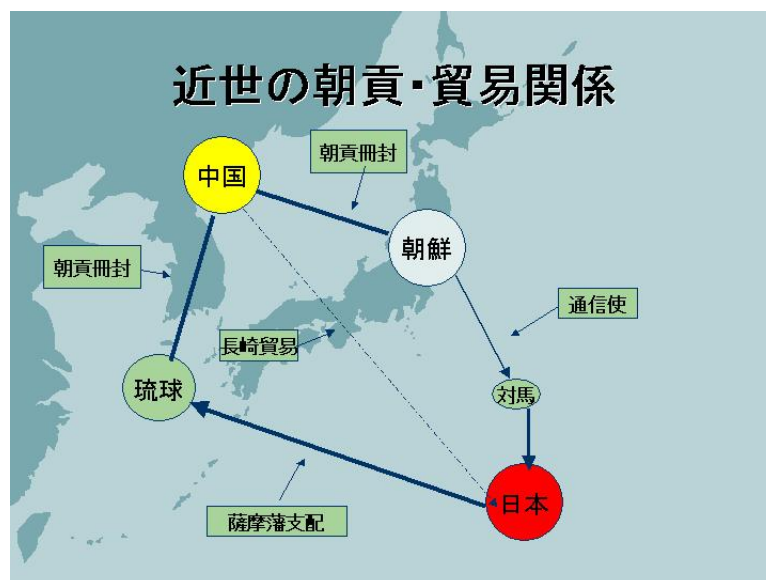
ところで、この大君という称号は、朝鮮では国王の子どもで、世子でない王子の呼び名なのです。ところが中国では大君というのは、元来は皇帝のことを指している言葉です。ただし、これは古典の言葉なので、実際に使われることはほとんどありません。ただ、古典のいわゆる雅語としては、大君というのはあくまでも皇帝のことです。

ここがちょっといんちき臭いところですが、この大君に着目して先の表を書き直してみますと、図表 15 のように中国と朝鮮、日本との関係が逆になってしまうのです。大君で並べてみますと、中国皇帝が朝鮮国王や日本の天皇よりも下になってしまう。中国人はこのような称号にうるさく、称号の違いで格差をつけるのが好きですから、朝鮮の国王の称号には干渉しますが、その下でまさか王子を大君と呼んでいたというところまでは調べなかったのでしょう。それでこういう一種のいんちきをやって、観念的に関係を逆転させていたのです。日本が天皇の存在を隠して、朝鮮や中国との関係を自分に都合のよいように変えたのと同じことです。

しかしなぜこういうことが起こるかといいますと、中国が不平等な国家関係を指定しているわけですから、それが再生産されて、逆転で不平等な関係を作っていくということで、東アジアでは対等な国家関係がないために、いろいろな形で不平等な国家関係がどんどん再生産されているわけです。ここにはベトナムを書いていませんが、ベトナムはやはり朝鮮と同じように、中国の冊封を受けていて、中国に朝貢していて、越南国王という称号をもらっているのですが、それは



図表 15



図表 16

中国に対してだけで、国内では皇帝とっていました。これも同じようにイレギュラーな関係になっているわけです。

次は、それを貿易など経済関係によって考えてみます（図表 16）。

まず、中国と日本の関係です。日本は、朝鮮との間では通信使が朝鮮から来ていて、関係がありましたが、その実務は対馬がやっていました。対馬を通して朝鮮と関係を持って、朝鮮は中国に冊封をしている。

この当時日本は、中国から生糸を大量に輸入していましたが、それは朝鮮と関係を通して間接的に輸入していた。生糸を消費していたのは、主に京都の西陣の織物業者です。朝鮮からは毎年2回、中国に朝貢するための使節が行きます。朝鮮の使節が北京に行くころになると、京都の西陣の業者がお金（銀）を京都の対馬藩邸に持っていきます。今の京都の三条河原町にカトリック

の教会がありますが、その辺りがかつての対馬藩邸でした。そこに西陣の商人が銀を持ってくる。そうすると、対馬藩がそれを朝鮮に送ります。朝鮮はそれを中国に持って行って、生糸を買う。そして逆のコースで京都まで生糸が送られてくる。このように貿易をしていたのです。

これと似たような関係が琉球（沖縄）です。沖縄も朝鮮と同じように、中国に朝貢をしていました。琉球国王の称号をもらっていました。ところが、ご存じのように江戸時代には、実際には琉球は薩摩が実効支配していました。中国から使節が来ると、薩摩の役人はこそこそ隠れて、中国に分からないようにしていたのです。中国も後には、うすうす気がついていたようですが。

こういうわけで、日本は対馬、薩摩という二つの辺境の藩と、朝鮮、琉球という中国に朝貢している二つの国というクッションを置いて、中国と関係を持っていました。ただし琉球経由での中国との貿易はありません。それはこれとは別に、直接貿易をご存じのように長崎でやっていたからです。ただし長崎貿易は一種の民間貿易で、日中双方の政府の担当者が会うことはありません。そういう意味では、直接貿易でありながら、間接貿易でもあります。中国側の役人は日本に行く商人をチェックだけして、商人がやってくる。日本では長崎で、長崎にいる長崎奉行をはじめとする役人がそれをチェックするというだけで、これは直接貿易ではありますが、双方の政府担当者が顔を合わせないという関係で、中国とできるだけ政治的に関係を持たないようなクッションを置く、そういう形で貿易をしていました。

これは要するに、今の言葉でいうと政経分離です。日本は戦後一時、政経分離が得意で、エコノミック・アニマルなどと呼ばれていたこともあります。実はもっと昔の江戸時代からやっていたのです。

中国と政治関係を結ぼうとすると、朝貢冊封関係しか道がないわけですから、どうも気が進まない。しかし中国と貿易はしたい。それで政経分離になるわけです。ただし、この政経分離というのは、ある意味では非常に高度な政治的な判断になりますから、政権分離をやるためには、実際には政治が経済をコントロールしなければいけません。それで経済で混乱が起こらないように、国家が全部それを統制する。民間の自由な往来は阻止したほうがよい。民間でかつてに往来しないで国家が統制するということで、これがつまり鎖国です。同じような政策を中国では海禁といい、朝鮮もやっていました。近世になるとこういう鎖国・海禁政策を東アジアの国々が執るようになるのは、理由があるのです。この鎖国・海禁体制からはみ出たものが、たとえば倭寇ということになります。倭寇は海賊というよりは、自由に貿易をしようとする海洋商人で、これは後で濱下先生からお話があるかと思いますが、初期の倭寇は日本人ですが、後期の倭寇はほとんど中国人で、要するに、その中国人は統制を抜け出して自由に貿易をしようとした人たちだといえるかと思いますが。

最近日中間の政冷経熱が問題になり、日中のトップ会談もずっとありませんが、こういう政経分離の現象というのは昔からあったわけです。

もう一つは、中台の貿易で、これも政治的には双方鋭く対立していますが、貿易だけはどんどん増えている、やはり政経分離です。要するに、双方の政治指導者が顔を合わせない関係です。合わせないで、貿易だけ、経済関係だけを持つということで、これは小泉首相がそう思っているかどうかは知りませんが、政治的な関係をもとうとすると面倒なことが多すぎるので、それを回避しようというわけです。

少し唐突かもしれませんが、未開人の「無言貿易」というのがあります。これは、二つの部族がいて交易をするわけですが、一方の部族が境界のところに自分たちが売りたい物を置いておい

て退散します。そうすると、隣のほうの部族が来て、それを持って、それに見合うような品物を置いていく。翌日またこちらのほうが来て、それを持っていくということで、双方が顔を合わせないで、相談をしないで、品物だけ交換するのを「無言貿易」といいます。

これは未開社会では広く行われていたらしいのですが、要するに、双方が顔を合わせるといろいろトラブルがある。トラブルを起こさないで交易だけをしようというシステムです。政経分離というのはそれに非常によく似ているわけで、ある意味では原始的な方法であるということになるかと思います。

遣唐使のころは何回かに1回は船が沈んでしまうので非常に危なかったのですが、江戸時代ぐらいになると大体そういうことなしに往来できるようになります。交通が便利になると行き来は盛んになるのが普通ですが、東アジアでは不思議なことに、交通手段が発達すればするほど、往来が逆に少なくなり制限されるという傾向があります。それは政治的摩擦を避けるために、国家が貿易を管理し、政治面では接触しないという発想のせいです。

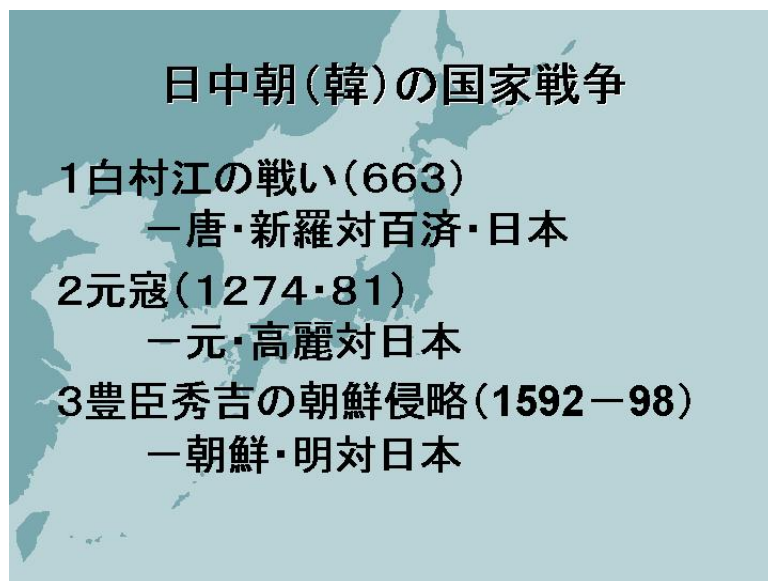
この問題は今も同じで、民間の自由な往来を許すと犯罪者も来るし、いろいろ面倒だ、これを統制したほうがいい、特に中国に対してそういう主張をする人が一部にいます。代表は今の東京都知事でしょう。しかし、皆さんよくお分かりだと思いますが、こういう鎖国や海禁などというやり方は、今の時代にはもうやろうと思ってもできるものではありません。完全に開放してしまえば、こちらからいい人も悪い人も行くし、あちらからもいい人も悪い人も来るというので、結局同じになってしまうので、それしかないと思います。往来を制限することで秩序を守ろうという発想は現実的ではありません。

東アジアでは、近世に鎖国や海禁が行われたため、お互いの国の認識、相互理解が非常に欠如している。中国と日本と朝鮮は、世界にも例がないほど長い交流の歴史があるのですが、その割には相手のことを知らない。江戸時代の学者、貝原益軒の『養生訓』という本を見ますと、これは江戸時代の庶民にもよく読まれ本ですが、そこに、「からやまとの史を見れば、遠きいにしへのあと、目のあたりに明らかに見えて、わが身あたかも其地にあへる心地して、数千年のよはひをたもてるが如し。此楽もまた大なるかな」と書いてあります。

「からやまと」は、つまり中国と日本です。基本的には日本のことが分かればいいわけですが、中国のことはやはり知らなければいけないということで、ここに朝鮮という隣の国は入っていません。これは朝鮮でも同じで、自分の国と中国のことだけ知っていれば、日本のことなど知らなくてもいいという時代がずっと長く続いていました。中国に至っては、日本のことも朝鮮のことも知らなくてもいい。中国のことだけ分かれば十分だということで何千年もやってきたわけで、交流が盛んで、歴史的に漢字を共有しているなど文化的関係が深い割には、お互いのことをあまり知らない。最近、韓流ブームで皆さん、やっと韓国のことを知ろうというかたが増えてきましたが、つい最近までこういう状況でした。

ただし、こういう関係が必ずしも悪い面ばかりであったかという点、いい面もあったとおっしゃる方も、学者の中にはおられます。例えば、日中韓の国家戦争というのは、歴史的にどれくらいあったかといいますと（図表 17）、まず、朝鮮半島の白村江というところで 663 年に唐と当時の朝鮮半島の新羅、そして百済と日本が戦ったというのが最初です。2 番目が元寇です。これは元と当時の朝鮮半島の高麗、そして日本との戦いです。3 番目が豊臣秀吉の朝鮮侵略です。

このうち白村江というのは、日本と百済の連合軍はあっという間に負けてしまったので、あまり大した戦いではなかった。元寇はご存じのように、台風で船が沈んでしまったので、本格的な



図表 17

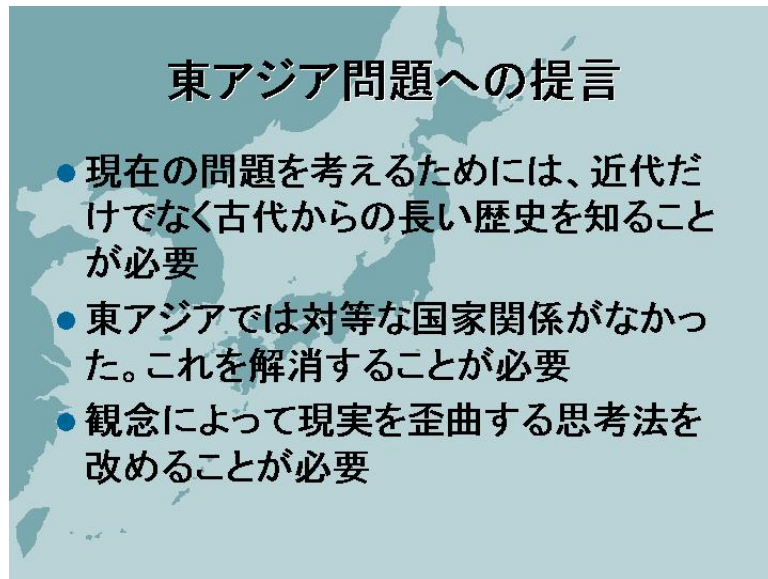
戦争になる前に終わってしまっていて、本格的な戦争はこの豊臣秀吉だけです。日中韓三国の国家間の戦争は、1000 年間にこの 3 回だけです。もちろんこれは国家間の戦争で、それ以外にも倭寇などがあったのですが、とにかく国家間の戦争はこれだけです。その後、近代になってからは、日清戦争、日中戦争、朝鮮戦争と 100 年間で 3 回です。1000 年間に 3 回というのが多いか少ないかは、一概に言えないかもしれませんが、少なくともヨーロッパに比べれば非常に少ない。東アジアでは相対的に平和が保たれた。それは朝貢冊封体制があって、その結果として鎖国、海禁制度による管理貿易、政経分離などが行われ、それが戦争に対する一定の抑止力となったからだという意見もあります。それは確かにそうだと言えるでしょう。

ヨーロッパは戦争ばかりするので、何とかしなければいけないというので第一次世界大戦後に国際連合が生まれ、それは EU にまでなったわけです。それに比べると東アジアは戦争が少なかった、その代わり相互認識も少なかった。どちらがどうとは言えませんが、確実なことは、これからの時代に朝貢冊封体制や政経分離のようなもので国家関係を作っていくということは不可能だということです。

最後に東アジア共同体への私なりの問題点、提言を申し上げます（図表 18）。

まず、現在の問題を考えるためには、近代だけでなく、古代からの長い歴史を知る必要がある。現在、日中問題、日韓問題は、近代以降の戦争問題、植民地問題が先ほどの靖国問題も含めて問題になっています。人によっては、それ以前は非常に友好的だったのだと考えている人もいます。例えば朝鮮との間には通信使が来ていた。中国との間にも長崎貿易というのがまれに見る平和的な関係で行われていたと。もちろん、豊臣秀吉の戦争もありましたが、戦争は非常に少なく、平和な時代が長かったという考えです。それはよかったのだと考えておられるかたもありますが、実はよかったこともあります、よくなかったこともあったわけです。現在のよくなかった問題の根っこというのは、当然、近代から始まったわけではなくて、近代以前から始まったものだという事です。それを知る必要があります。

その中でも最も重要なことは、東アジアでは対等な国家関係がなかったということです。したがって、将来、東アジア共同体を目指すのであれば、これをまず解消することが必要です。もち



図表 18



図表 19

ろん今は形式的には対等な国際関係になっていますが、過去の発想自体は、そう簡単に人間は変わるものではないので、まだ持っています。

その最たるものが、観念によって現実を歪曲する思考法です。これは先ほどお見せした地図にも如実に表れていて、日本もある意味では例外でないと申し上げました。これは地図だけではなく、いろいろなところにこういう発想というものが出ています。例えば日本でいう建前と本音などの問題も、突き詰めていけばこういうことに行き着くと思います。これを改める必要があります。

そういう意味で、今問題になるのが何かということの一つだけ申し上げます。図表 19 は最初にお見せした東アジアの地図です。これは先ほど日本の東アジア地図と申し上げましたが、実際には中国の現在の主張に基づいて書かれている地図であるということができると思います。つまり、

中国は中華人民共和国です。朝鮮半島には北朝鮮と韓国がある。こういう認識は中国の主張に沿って書かれています。

中国から見た今の東アジア関係は、今、北京政府は北朝鮮と韓国の両方とも国交関係を持っているわけで、朝鮮半島には二つの政府があることを認めています。しかし、中国は一つであって、一つであらねばならないというわけで、台湾の政府は認めないという立場です。これは中国にも言い分はあると思いますが、では、朝鮮半島と中国とで統一について何か違いがあるかという、中国が最終的に統一され、ほぼ現在と同じ領土になったのは13世紀の元のと看です。これに対して朝鮮半島は中国より統一された時間は長く、高麗が統一した10世紀以降ずっと統一国家です。統一国家であるということを見張するるのであれば、中国と同じく、あるいは中国以上に朝鮮は統一国家であるという気持ち強いわけ看。中国が、朝鮮半島には二つ国家があってもいいけれども、中国は一つでなければだめなのだというのは、中国と朝鮮とは違ふのだ、おれたちはおまえたちとは違ふのだ、といっているに等しいわけで、これは世間の常識から見れば、明らかにダブルスタンダード看。

こういうことは実は皆分かっていること看。特に韓国や北朝鮮ではこういうことはだれもが分かっているの看ですが、それをなぜ中国にいわないかという、いってもしようがないとあきらめているわけ看。朝鮮半島の人々は中国との交渉の歴史が長いので、こういう問題を中国人に言っても無駄だということが、分かりすぎるほど分かっている。

今、私が申し上げたことは、ここにおられる多くのかたが常識的に考えて、そんなにおかしくないだろうと思われると思いますが、ただし、一方で、皆さんご存じのように、これは今発言することは、現時点では非常に大きな問題を引き起こしてしまひます。

つまり台湾と中国大陸との問題看。先ほど申し上げたように、台湾は、台湾が大陸全体を支配しているという主張を放棄しました。憲法はまだ変えていませんが。一方の大陸のほうは、台湾を統一するのに一つの中国という原則というものを強く主張して、それを世界的にも認めさせようとしています。これは中国としては、歴史的経緯、文化的発想から当然の主張看。しかし一度、中国の歴史的経緯、文化的発想から離れて、この問題を客観的、あるいは常識的に考えるなら、中国のこのような主張には無理がある。

もちろん中国が統一された国家であることに越したことはないわけで、我々周辺の国の人間もそのように願っていますが、問題は其の結果ではなくて、統一に至るプロセスだと思ひます。

中国北京政府にとっては、台の政府は好ましくない、気に入らない、偽物の政府であるわけ看ですが、気に入らなくても、実際に存在しているということは厳然たる事実看。台湾に、現在の世界的なスタンダードから見て民主的選挙によって選ばれた総統を元首とする政府が存在し、その政府が台湾を統治しているという事実は、だれも否定できないでしょう。

ところで、この総統という言葉にも実はちょっとした問題があります。日本では総統という、すぐヒトラーを思い浮かべるわけ看ですから、台湾に総統がいると聞くと、よく知らない人は、台湾は独裁国家かと思われのかもしれない看。総統というのは President の中国語訳看。日本では陳水扁は総統で、韓国の盧武鉉は大統領といひますが、英語に訳せばどちらも President 看。中国語では、アメリカのブッシュも韓国の盧武鉉も。その他、世界中の大統領はみんな総統看。これは漢字文化圏で同じ漢字を使っているの、中国で使っている言葉をそのまま使っているというところから起きた問題看。日本の新聞、テレビなどが、故意かどうかは知りませんが、台湾にだけ総統という言葉を使うのは、誤解のもとで、陳水扁大統領と呼んだほうが正確

な理解にはなりません。

こういうことを言いますと、中国は必ず、「台湾独立派」というレッテルを貼ってきます。もし私の講演を読売新聞が載せると、中国から抗議が来るということになります。私は別に台湾独立を支持しているわけではありませんし、全然何の関係もありません。それはどちらでもいい、どちらでもいいといいますが、歴史的に統一国家だったわけですから、もちろん平和的に統一してほしいと思います。ただし、先ほども申し上げたように、やはりプロセスというものが大切で、中国が現実を無視したままで、あくまでも一つの中国の政策にこだわることは、周りの民族、特に韓国、北朝鮮、ベトナムのように、かつて朝貢国であった、日本も一時期そうだったのですから、そういう国から見ると、中国は状況によっては、「おまえたちは昔、朝貢国だった」というようなことをいわないとも限らない。こういうことを申しますと、「まさか、そんなばかな」と思われるでしょうが、少なくとも中国は周りの民族、国家にそのようなばかばかしい心配、危惧を抱かせるようなことをやっているということを知る必要があると思うのです。

私は別に中国を非難しているわけではなくて、先ほど来、申し上げているように、この問題は中国だけではなくて、韓国も北朝鮮も日本も台湾も、東アジア全体で共有している問題点なので、これをなくしていかなければいけないということを申し上げたいのです。

現実をそのまま直視するということ、それによって本当に対等な関係、相互の正しい理解を得ることが重要であって、その結果、仲良くできないなら、それはそれで仕方がない。だいたい隣どうしの国が仲良くするということは非常に難しいことで、イギリスとフランス、フランスとなどを見ても、必ずしも仲は良くない。しかし国民どうしお互いのことは、東アジアのわれわれにくらべれば、ずっとよく理解しています。日本では、日中、日韓問題に関心の高い人ほど友好が重要であると考え傾向がありますが、友好第一というのは、これまた一種の虚構であって、それよりも平等な関係と相互理解が大切だと思います。平等な関係と相互理解さえちゃんとあれば、たとえ友好的でなくとも、平等と理解に基づく良好な関係を築くことができるのです。むしろ平等と理解の前提のうえに友好な関係ができれば、それに越したことはありませんが、友好第一を最優先目標にし、その前提のもとに、平等、理解を得ようとすると、時には本当の平等と理解を得られない場合もあるのです。

最後に、その点を説明するために、歴史を知ることの一例をお話します。図表 20 は今回のシンポジウムのパンフレットです。京都大学の会議でこのポスターを出したときに、ある日本史の専門の先生から、これは非常にまずいというお叱りをいただきました。東アジアと向きあうためにというのに、過去の戦争での日本軍の残虐行為を想起させる日本刀が出ている。「これはまずいですよ、配慮が足りない。」と言われて、私も正直ギョッとしました。

このポスターは私が作ったわけではありませんが、私が採用したので、「ああ、しまった」と内心していました。しかし、もう配ってしまったので、後悔してもおそい、しかもこのポスターは地下鉄広告用にも刷りましたが、そちらはさらにまずくて、日本刀の刃のところが「東アジアといかに向きあうか」という文句に重なっていて、これを見たときは本当に一晩寝込むぐらい悩みました（笑）。しかし、後でよく考えてみると、確かにこの図柄は日本軍の残虐行為を想起させるという可能性もあると思いますが、しかし、歴史的に見ると、日本刀に対するイメージというのは必ずしもそれだけではないのです。

例えば中国では、11 世紀に歐陽修という唐宋八家の一人に数えられる有名な文学者ですが、その人の「日本刀歌」というものがあります。それは宝物（宝刀）が日本国から来た。商人から買



図表 20

ったもので、非常に精巧で素晴らしく、魔物から身を守ることができるのだというようなことを言っています。あるいはまた、日本は朝貢して、しばしば往来していたが、士人（日本の知識人）は詩を作るのがうまくて教養があると、非常に好意的に書いています。日本刀の詩はほかにもあって、『資治通鑑』を書いた有名な歴史家、司馬光なども同じような詩を書いています。それらの詩には、日本刀は凶器や武器というイメージは全くありません。

また室町時代の将軍は、日本国王の称号で中国の明朝に朝貢して貿易をやっていました。いわゆる日明勘合貿易です。150 年間に 17 回遣明船が行っていますが、日本の主な輸出品は日本刀でした。その 17 回の遣明船で日本刀 20 万本が輸出されたといわれています。これは武器輸出ではありません。20 万本というのは非常に多いですが、150 年間に 17 回ですから、1 回にすると 1 万本ぐらいで、それぐらいの数では兵士に配って戦争で武器として使うには足りません。そうではなくて、工芸品、美術品、装飾品としての用途が主だったと考えられます。このように日本刀には歴史的に見ると必ずしも悪いイメージではなくて、いいイメージもあるのだと考えて、ちょっとほっとしたわけです（笑）。

これは言い訳のようなものですが、ただ、何かこういうことが起こるたびに、そういうことを中国に言うのはまずい、友好を傷つけるというのもどうかと思うのです。これは先ほど申し上げた、友好を第一にすると、かえって理解と平等を妨げるという事例です。それより、日本刀には歴史的にいろいろなイメージがあるということを説明すること、あるいはそもそもこのポスターでの日本刀は、問題を解決するというテーマのシンボルとして使ったままで、それ以上の意図はないということを説明することが重要で、そのためたとえ一時的に相手の感情を害しても、長期的に見れば、その方がいいと思います。実際、このポスターを見て、中国人や韓国人がけしからんと思うとも限らないわけで、一種の過剰反応ともいえます。心配していた抗議は一つも来ませんでした。

ちょうど時間ですので、これで私のお話を終えさせていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。